

高速増殖原型炉「もんじゅ」をどうするか。原子力規制委員会の動向を受けた文部科学省の検討会は、受け皿を示せなかった。かつての「夢の原子炉」を、もうこれ以上、野ざらしにすべきでない。

2016-6-4

論説

もんじゅ

もう廃炉にしてあげて

もんじゅは悲劇の原子炉だ。通常の原発の使用済み燃料からウランとプルトニウムを抽出し、燃料として再利用できるだけの燃料を、さらにその燃料が理論上、消費すればするほど増殖、すなわち増える。もんじゅはこのような核燃料サイクルの興、資源小国日本にとって、まさに夢の原子炉とまで呼ばれた。

もんじゅは通常の軽水炉とは違い、冷却水の代わりにナトリウムを使う。空気に触れると激しく燃える難しい物質だ。一九九五年暮れ、発電開始からわずか四カ月足らずで、深刻なナトリウム漏れ事故が発生した。その際当時の運営主体の動力炉・核燃料開発事業団（動燃）が、事故が小さく見えるように編集した現場のビデオを公開するなど、隠蔽工作が次々明らかになり、激しい批判にさらされた。

信用失墜の動燃は核燃料サイクル開発機構に改組した。その年に二〇〇五年、今の日本原子力研究開発機構になった。とこそそのずさん体質、隠蔽体質は一向に改善されず、二二年には二万四千の機器で点検漏れが見つかった。

原子力規制委員会は昨秋、不祥事を繰り返す機構には「運転を任せるべきではない」と、文科相に異例の勧告を行った。

もんじゅの燃料を抽出する青森県六ヶ所村の再処理工場も「ミナール建設」、米国家安全保障会議（NSC）は日本の再処理事業に対する懸念を隠さない。核燃料サイクルは、すでに破綻を来している。初臨界から二十二年、もんじゅは延べ二百数十日しか動いていない。それでも、年に二百億円もの維持費がかかる。

電力業界は運営に難色を示しており、文科省の検討会も受け皿を示せていない。人間のうそやばかさんが、かつての夢の原子炉を、引き取り手のない、金食い虫の厄介者におとしめた。

実証炉に至る以前の原型炉、もんじゅは立派な役目を終えた。もう、廃炉にしてあげたい。科学の夢、をいかに壊しているものにするべきか。

廃炉には長い年月と新たな技術開発が必要だ。研究施設としては貴重な存在になる。地元の雇用はできるだけ維持できるはずだ。